

* 当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors

共同利用・共同研究課題「近世イスラーム国家と多元的社会」
(平成 25 年度第 5 回研究会)

日時：平成 26 年 3 月 25 日 (火曜日)

14 時より 18 時

場所：AA 研 マルチメディア会議室(304)

報告要旨

1. 小野 浩 (AA 研共同研究員, 京都橘大学)

「アク・コユンル スルターン・ヤアクープのファルマーン 1 通から」

本報告では、まず、893 年ズール=ヒッジャ月 7 日/1488 年 11 月 12 日のアク・コユンル朝スルターン・ヤアクープの勅令が紹介された。これは、すでに、19 世紀後半のファールス地方史『ファールスの書』に写しが収められ、また、モダッレスィー・タバータバーイーによって写真が公刊されているものである。内容は、サイイド・サドル・アッディーン・ムハンマドが建設したマドラサに対するワクフ財の村落・土地の諸税を免除するというものである。このサドル・アッディーンの子孫が『ファールスの書』の著者であったため、その著作にこの勅令が含まれることになったのである。

この勅令の写真版にも、報告者が以前から研究対象としていた冒頭の「我が言葉」というトルコ語の表現を見ることができる。しかし、今回、報告者が着目したのは、この「我が言葉」の下にある本文の書き出しの 2 行の字下げであった。発給者の名前と「我が言葉」の下、あえて行の半分まで下げるこの方式は、発給者への敬意を示すものであり、イスラーム圏の多くの王朝の勅令に見られるものなのである。報告者は、同様の字下げについて、ティムール朝、サファヴィー朝、アフシャール朝、カージャール朝、シャイバーン朝、ジャーン朝、ブハラ・アミール国、ヒヴァ・ハン国、クリム・ハーン国、ムガル朝の例を提示した。

さらに、報告者はその起源を求めて、モンゴル時代の元ウルス、フレグ・ウルス、チャガタイ・ウルス、ジュチ・ウルスの例を示し、アラビア文字でないハスパ文字やウイグル文字で表されていても、同じ字下げの規則が守られていることを明らかにした。そして、さらに遡ると、ウイグル文書やウイグルが文字を借用したソグド文書にも、同じ規則が見られることが明らかとなった。これ以上の追求は資料的に困難であるが、その原点はおそらくは擡頭などと同様、中国にあったと考えられる。すなわち、この伝統は中国からソグド、ウイグル、モンゴルを経て、ティムール朝やアク・コユンル朝以降の諸王朝に 20 世紀初頭まで継承されたのである。

しかしながら、近世国家を考えると、サファヴィー朝やムガル朝では字下げは継承するものの、「我が言葉」という書式が失われていく。また、オスマン朝においては、「我が言葉」も字下げの伝統も継承されていない。その意味を、どう考えるかが今後の課題である。

(文責：近藤信彰)

2. 堀井 優 (AA 研共同研究員, 同志社大学)

「近世エジプトのヴェネツィア人」

東地中海における異文化接触の秩序構造は、イスラーム圏のなかでは宗教的少数派であり、かつムスターミン（被安全保障者、非ムスリム外来者）の法的地位にあったヨーロッパ人の視点から特徴づけることができるように思われる。ここでは、オスマン帝国が東地中海の大半を支配した近世（16-18世紀）のエジプトにおけるヴェネツィア人を対象に、16世紀後半・17世紀前半にカイロに駐在したヴェネツィア領事が帰国後に公表した報告書をもとに考えてみたい。

ヴェネツィア人が現地で利害関係をもった個人および集団のうち、報告書に最もよく現れるのは、領事の交渉相手だったエジプト州総督である。両者間の交渉は、オスマン・ヴェネツィア間の外交・行政ネットワークの機能の一部をなしていた。16世紀中葉のいくつかの事例は、条約規定、とりわけ集団間および個人間の連帯責任の禁止のような基本的ルールの利用に関連する問題が、ときにエジプトのみならずイスタンブールの宮廷での交渉課題になったことを示している。これら個々の事例は、ヴェネツィア人の権利を擁護し、あるいは彼らの義務を明確にする結果をもたらした。

ヴェネツィア人の活動条件は、このようにオスマン権力の主導下で垂直的に形成されるとともに、彼らと都市社会との間の水平的な関係にも影響されていた。近世カイロのヨーロッパ人は、新開地アズバキーヤのキリスト教徒地区に隣接するヨーロッパ人地区に集住し、ネイションごとに集団を組織し、周囲の諸集団と関係していた。ヴェネツィア人にとって、オスマン財政と地中海商業に深く関わるユダヤ教徒は、明確な他者であるとともに、行政および商業上の対立と競合の相手だったが、商業面では依存関係も見られた。その一方でヴェネツィア人集団は、ときにフランス人集団との区分が流動的になるなど、その輪郭に曖昧さをもち、またクレタを中心に活発な日用品取引をいとなむギリシア系ヴェネツィア臣民を含む多様性を有していた。ヴェネツィア人、ユダヤ教徒、ギリシア人の広域的な活動圏は、オスマン帝国領から少なくともヴェネツィア領まで重複していたから、カイロ社会には、オスマン帝国の枠組を越えて展開する諸集団間関係が内在化されていたといえよう。

(堀井 優)